

自然会話における 「確認用法」の「ノデハナイカ」の使用実態

張 恵芳

キーワード：確認用法、自然会話、ノデハナイカ、聞き手の私的領域、ポライトネス理論

1. はじめに

近年、モダリティに関する研究成果が数多く見られる。その中で、一つのモダリティ表現形式を詳しく分析しその意味・用法を細かく記述する研究もあれば、一つの「用法」を取り上げそれに含まれる表現形式を体系化するというような研究もある。モダリティ表現形式「ノデハナイカ」に関しても同様に、安達（1999）、張（2004）などでは、「ノデハナイカ」の意味・用法を中心に記述が行われている。それに対して、三宅（1996）、宮崎（2000；2005）などでは、「ノデハナイカ」の「確認用法」¹を取り上げ、同じ用法の他の表現形式との異同を中心に考察がなされている。

意味・用法を記述する際、先行研究では、「この表現形式にはこういう意味・用法がある」、「こういう下位用法においては、この表現形式とこの表現形式が類似性を持つ」というような結論にとどまるのが一般的である。そして、用いられるデータは創作されたものの例えば小説やシナリオなどが主流である。

「確認用法」が会話の中で出現するという事を考えると、実際の自然会話の中で、各表現形式は同じデータにおいて使用頻度などそれぞれの分布がどうなっているのか、意味論的に互換性を持つとされる表現形式は自然会話における表現機能には差がないのか、そして、そういった違いを生み出した原因は何なのか、というような問題をさらに追究する必要があると思われる。従来の意味論的な研究成果では説明できないところを語用論的な角度から考え、自然会話における「確認用法」の姿を捉える研究の一環として、本稿は「ノデハナイカ」を取り上げる。

本稿では、まず、先行研究を概観し、問題意識を明確にする。続いて、自然会話における「ノデハナイカ」の分布を、データをもって紹介する。最後に、なぜそういう分布になっているのか、鈴木（1989；1997）の「聞き手の私的領域」理論を踏まえて説明を行う。そして、それは Brown & Levinson(1987) のポライトネス理論でも解釈できると付け加え

¹ 国立国語研究所（1960:109）の「確認要求の表現」（「話し手が自分の判断について相手の確認を求めることの明瞭な表現」）はその後、「確認用法」（蓮沼 1995）、「確認要求的表現」（三宅 1996）、「確認要求表現」（宮崎 2000；2005）など、様々な名称が用いられているが、本稿では「確認用法」という用語を使う。その中身に関してそれほど差がないことを断っておきたい。

る。

2. 先行研究の整理と問題提起

2.1 田野村（1988）による分類と「ノデハナイカ」の形態的特徴

田野村（1988:17）では、否定疑問文の形式「デハナイカ」を以下のように三種類に分類している。

第一類：「発見した事態を驚き等の感情を込めて表現したり、ある事柄を認識するよう相手に求めたりするもの」。例文：「よう、山田じゃないか。」「何をする、危ないじゃないか。」

第二類：「推定を表現するもの」。例文：「どうもあの男犯人じゃないか？」「雨でも降るんじゃないか？」

第三類：「「ナイ」が否定辞本来の性格を発揮するもの」。例文：「そうか、1は素数じゃないか。」「本当に1は素数じゃないか？」

田野村（1988）の分類基準は、その後、数多くの研究に受け継がれている。本稿も基本的にそれに従う。つまり、本稿で取り扱う形式は田野村（1988）の第二類に相当するもので、次のような形態的特徴を有する：

- ① 体言及びナ形容詞語幹に接続するのみである。用言および助動詞に接続する場合、「の」で前接の部分を体言化する必要がある²。したがって、「のではないか」及びその変異形で用いられるのが一般的で、便宜上、本稿では「ノデハナイカ」で一括する。
- ② 「ノデハナイカ」は文脈や文体等により、様々な変異形で用いられる。例えば、敬語の問題と関わる「のではありませんか」、「のではないですか」；「のでは」の縮約形「んじゃ」のつく形態「んじゃないか」、「んじゃありませんか」；話しことばで上昇イントネーションの顕現化による「か」の脱落形「んじゃない↑」など。

2.2 「ノデハナイカ」の意味・用法

安達（1999:131）では、「不確かさの表現としての「ノデハナイカ」の特徴は、話し手にとって判断を下すことができない状況で、「傾き」の存在によって話し手の見込みを聞き手に伝えるところにある」と述べていて、「ノデハナイカ」の「肯定への傾き」について詳しく考察している。

それに対して、三宅（1996）、宮崎（2000）などでは、「ノデハナイカ」を「確認用法」の表現形式³の一つとして扱っていて、「命題確認の要求」（三宅による用語、例(1)と(2)）や「聞き手依存型」（宮崎による用語、例(3)）のような下位用法において、「ダロウ」と互換性を持つと論じられている。

- (1) 「待ったでしょう、随分？」「いや、それほどでもない」 （三宅 1996 : 115）

² 名詞述語文やナ形容詞述語文が「ノデハナイカ」をとるときは、「彼女はまだ学生なんじゃない？」のような形態をとることもある。

³ 「確認用法」の表現形式は、学者によって、取り扱う対象は違うが、「ダロウ」、「デハナイカ」、「ノデハナイカ」、「ヨネ」、「ネ」などの表現形式がある。

(2) 「おねえちゃん、会いたいんじゃない。今井さんと、すっごく」 (同上)

(3) 君、昨夜、徹夜した{だろう／んじゃないか} (宮崎 2000 : 10)

以上の先行研究を踏まえて、張 (2004) では、神尾 (1990) の「情報のなわ張り理論」を参考に、「ノデハナイカ」には三種類の意味・用法が連続性を保ちながら存在すると指摘している。

① 平叙文に用いられ、推測の意味を表す。

(4) どうもそんな時代は、終わったのではないか。 (現代人物誌)

② 疑問文に用いられ、確認の意味を表す。

(5) 「お忙しいんじゃない？」

「いや、僕は大体役立たずなので暇なんです！」 (女社長に乾杯)

③ 中間的なもの⁴。

(6) 「しかし、そうすぐに動くとも思えませんがね」と谷口は言った。

「でも、何かあるんじゃない？口をつぐむ代わりに、きっと何かを手に入れるはずだもの」

「そうですねえ、あの女を黙らせるのは、金ぐらいのものだろうからな」

(女社長に乾杯)

本稿においては、②と③の意味・用法が議論の中心となるので、それについて、ここでもう少し詳しく説明を付け加える。

神尾 (1990) で提唱された「情報のなわ張り理論」とは、文によって表現される情報の性質と文形との関連を扱う理論である。即ち、話の情報内容が話し手と聞き手のどちらに属するか、その帰属領域に応じた言語形式の選択のルールのことである。

同じ言語形式であっても「情報のなわ張り」関係が変わると、用法も違ってくると、本稿は考える。まず、情報のなわ張りを大まかに四つのケースに分けることが出来る。即ち、「話し手のなわ張り内・聞き手のなわ張り内」、「話し手のなわ張り内・聞き手のなわ張り外」、「話し手のなわ張り外・聞き手のなわ張り内」、「話し手のなわ張り外・聞き手のなわ張り外」といった四つの組み合わせである。「ノデハナイカ」の用法との対応関係を入れると表 1 のようになる。

【表 1】情報のなわ張りと「ノデハナイカ」の用法との対応関係

		聞き手のなわ張り	
		内	外
話し手のなわ張り	内	×	×
	外	確認用法	意見要求用法

⁴ 張 (2004) においては、具体的な用法名を与えなかったが、宮崎 (2005 : 121) では、それを「意見要求」の用法としている。

まず、情報が話し手のなわ張り内のものである場合、推測という意味がつきまとう「ノデハナイカ」を使うことはできない。例えば、現場の「いいお天気」という話し手にとっても聞き手にとってもなわ張り内の情報、そして、聞き手が知らない話し手自身のことに
関する情報を「ノデハナイカ」を用いて、聞き手に確認したり、同感を求めたりすることはできない。

(7) * (現場において) いいお天気じゃない?⁵

(8) *私、明日会議に行くんじゃない?

次に、聞き手のなわ張り内、話し手のなわ張り外の情報、例えば、例(5)のように、聞き手が忙しいかどうかを聞く場合、話し手が見込みを持って聞いているものの、答えはあくまでも聞き手が握っている。そういう場合、「確認用法」になる。つまり、話し手が聞き手によりの確かな情報を引き出すのがこの用法の動機付けである。

最後に、例(6)における「何かあるかどうか」というような情報は話し手のなわ張り内のものでもなければ、聞き手のなわ張り内のものでもない。そういう場合、話し手が自分の考えを提示し、聞き手に同感を求めている。ここでは、宮崎(2005)の用語に従って、「意見要求用法」とする。

「確認用法」と「意見要求用法」の区別は情報の所属⁶から判別できるだけでなく、その答えからもヒントが得られる。「確認用法」が例(5)のようにはっきりと「はい」、「いいえ」で答えられるのに対して、「意見要求用法」は「そうですね」のような表現が用いられる⁷。

2.3 問題提起

「確認用法」にしても、「意見要求用法」にしても、会話の中で出現する。従来、「ノデハナイカ」は小説の会話文や映画やドラマのシナリオなど、創作された話しことばのデータに基づく研究が主流である。実際の会話の中で、表現形式が一体どれぐらいの頻度で使われているのか、なぜそういう分布になっているのか、というような問題をさらに追究する必要があると思われる。

⁵ 表現形式を田野村(1988)の第一類の「デハナイカ」(ある事柄を認識するよう相手に求めたりするもの)と捉える場合、使用可能である。ここでは、「ノデハナイカ」と捉える場合を指す。

⁶ 情報のなわ張り所属と情報の内容所属は別問題だということを付け加えておく。例えば、病院の内科医師に向かって、「先生、私、ノイローゼにかかっているのではなりませんか」という発話においては、話し手である「私」に関する情報内容ではあるが、情報のなわ張りから言えば、「ノイローゼにかかっているかどうか」は内科医師である聞き手のなわ張り内、そういう知識を持っていない話し手のなわ張り外のものになるわけである。

⁷ 但し、「確認用法」において、「ね」を接続した返答も自然となる場合がある。例えば、「会いたいんじゃない、彼に」と聞かれて、「そうです」と答えるのも「そうですね」と答えるのも自然である。しかし、「意見要求用法」は「ね」抜きで答えるのはあまり自然ではない。例えば、二人とも筑波山に行っていない場面において、「筑波山、今時、一番きれいなんじゃない?」という発話に対して、「そうです」と答えるのは不自然である。ここでは、答え方はあくまでもテストとしてあげただけで、実際の会話では、必ずしもこうなっているとは限らない。「うん」、「えー」などを用いて答えることも十分ありうる。その区別に関しては、ここで深入りしないことにする。

以上の問題を明らかにすることによって、自然会話における「確認用法」の「ノデハナイカ」の位置づけ、そして、会話における「ノデハナイカ」の「確認用法」と「意見要求用法」の使用頻度の差、また、その差の存在する理由も明らかになってくると思われる。

3. 自然会話における「ノデハナイカ」の用法分布

3.1 データの性質

自然会話といっても、さまざまなヴァリエーションが存在する。その全ての実態を調査するのは不可能で、本稿は、同世代の友人同士の雑談をデータとする。その理由として、まず、そういう雑談では、「確認用法」表現形式の出現率が高いと見られる。次に、データを取る際、「共通の趣味などについて普段どおりにおしゃべりをしてください。話はどの方面にとんでもかまいません。話す内容は、研究の対象としません。自然であればであるほどいいデータとなります」という指示を出すことで、データの自然さが最大限に保障できる。最後に、違う年齢や性別のデータを取り上げることによって、データの代表性が保障できる。

先行研究でも（安達 1999；張 2004；宮崎 2005 など）明らかにされたように、「ノデハナイカ」の「確認用法」と「意見要求用法」は「推測用法」から派生してきたもので、どちらも「肯定への傾き」という話し手の推測の意味が強く残っているのである。親しい間柄同士で使うという一般的な想定から、本稿は以下のようなデータを選んだ。

① 『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話 1（日本語母語話者同士の会話）2007 年版』（宇佐美まゆみ監修）20 代の女性友人同士 10 組計 187 分 50 秒の会話⁸；

② 補充資料として、50、60 代の女性友人同士 2 組計 66 分 53 秒の会話⁹を用いる。

①も②も関東出身或いは長年関東在住の話者から取ったものである。話者同士は親しい友人同士¹⁰で、会話の内容は雑談である。よって、使用不使用・使用頻度の原因を考える際、上下関係、親疎そして性別による要素を考慮しない。

3.2 データの分布状況

自然会話における「確認用法」の「ノデハナイカ」の位置づけと、「ノデハナイカ」の「確認用法」と「意見要求用法」の分布を明らかにするために、表において、他の「確認用法」の表現形式¹¹「ヨネ」「ダロウ」「デハナイカ」の使用頻度と「意見要求用法」としての「ノデハナイカ」の使用頻度も合わせてあげる。そして、20 代と 50、60 代の集計数字をそれぞれ、表 2 と表 3 で表示する。

⁸ 発話内容の記述に関する記号は、本稿の考察する内容に合わせて簡略化或は修正したことがある。

⁹ 録音は 2008 年 11 月に実施したもので、筑波大学の「応用言語学演習」という授業の一環として、受講生が共同で作成したものである。なお、本稿で使うデータは筆者が確認した。

¹⁰ 「親しいかどうか」という判定は会話者本人のアンケートによるものであるが、会話のスタイルや内容などからもある程度判断することができる。

¹¹ 「ネ」も「確認用法」を持っていると三宅（1996）、宮崎（2005）などで論じられているが、本稿では、文末における「ネ」の用法判定の難しさを考慮して、それを今後の課題とする。

【表 2】 20 代女性友人同士会話における分布

コーパス番号	録音時間	確認用法総回数	ヨネ	デハナイカ	ダロウ	ノデハナイカ	
						確認用法	意見要求用法
1	15'13	34(100%)	16(47%)	15(44%)	3(9%)	0	2
2	17'03	30(100%)	15(50%)	6(20%)	9(30%)	0	0
3	15'58	49(100%)	27(55%)	13(27%)	9(18%)	0	0
4	17'27	39(100%)	31(79%)	3(8%)	5(13%)	0	1
5	26'14	49(100%)	36(73%)	13(27%)	0(0%)	0	2
6	22'29	66(100%)	31(47%)	30(45%)	5(8%)	0	2
7	23'07	65(100%)	43(66%)	20(31%)	2(3%)	0	0
8	17'54	58(100%)	27(46%)	22(38%)	9(16%)	0	1
9	15'08	33(100%)	21(64%)	7(21%)	5(15%)	0	0
10	17'17	47(100%)	18(38%)	14(30%)	15(32%)	0	0
合計	187'50	470(100%)	265(57%)	143(30%)	62(13%)	0	8

【表 3】 50、60 代女性友人同士会話における分布

コーパス番号	録音時間	確認用法総回数	ヨネ	デハナイカ	ダロウ	ノデハナイカ	
						確認用法	意見要求用法
11	35'28	100(100%)	47(47%)	37(37%)	16(16%)	0	4
12	31'25	105(100%)	63(60%)	19(18%)	22(21%)	1(1%)	1
合計	66'53	205(100%)	110(54%)	56(27%)	38(18.5%)	1(0.5%)	5

「ノデハナイカ」が用いられる発話は、データ①とデータ②を合わせて、全部で 14 例ある。その中で「確認用法」は 1 例しかなく、他は全部「意見要求用法」である。次にそれを示す。

「確認用法」:

- (9) A T ちゃんだけ来たときに
 S うん、行ったんじゃない?
 A うん、行ってきたのよ、またー

「意見要求用法」:

- (10) JF12 この 1 年中にこう、長編を読破に集中しようっていう
 JF11 えっ、今『源氏』だったら、やっぱり今時のはやりで寂聴に行くべきじゃない?

- JF12 かねー
- JF11 読みやすいんじゃない？
- JF11 だって、いま、円、円地文子の、私前に読んだけど、いま、円地文子は平気か、与謝野晶子はきついよ
- (11) JF11 「人名2名」来てるの？、いま
- JF12 きのお来てたんだけど
- JF11 きょうは来てないの？
- JF12 分かんない
- JF12 毎日来るとは限らないんじゃない？
- JF11 うーん、いや／／明日
- JF12 ／明日は来るでしょう
- (12) JF18 なんか、いろいろ、こう、いろんな方向から書いてみてて、自分が一番しっくり行くようにまとめなおすっていう感じに、で、いいんじゃないの？
- JF17 そうなんだろうね
- (13) JF19 ま、それはでも、人の、それぞれじゃない？
- JF20 うん
- (14) JF19 何とかした後に、こう結婚する相手がいればいいん／／だけだね {笑いながら}
- JF20 ／ほんと {笑いながら}
- JF19 けっこう重要じゃない？ {笑い}
- JF20 それは、いるよ
- (15) IF01 ちょっと面接官の気分としてはさ
- IF02 うん
- IF01 話を聞きに来てくれた人を通そうかなーみたいな
- IF02 再確認できるんじゃない？
- IF02 でもその時に、好印象を持ったら、面接で、…
- (16) IF01 いや、でも、中旬だぜ {笑いながら}
- IF02 催促してもいいんじゃない？
- IF01 どうなのかな
- (17) IF05 もう、終わり？
- IF06 15分ぐらいでしょ、もうそろそろじゃない？
- IF06 止めていいかな？
- (18) K 高尾山これからいいんじゃない？、今ぐらいがいいんじゃない？、ね、紅葉が一番遅いから
- Y ふーん
- K どっかねそれよりもどっか

- Y 平林寺
 K あーそうだね、今がいいんじゃない？
 Y ね、私もあんまりあんなか歩いたことないな
 (19) Y そう、年のせいじゃない？
 K そっか
 (20) S 30 分ぐらい間違ってた？
 A 間違ってたんじゃない？
 S うん、運転してる人は、もっとびっくりでしょうね

データの分布からわかるように、親しい女性友人同士の会話においては、「確認用法」の「ノデハナイカ」が殆ど使われていないのである。その使用頻度は他の「確認用法」表現形式より遥かに低く、ゼロに近い。それに対して、「意見要求用法」の「ノデハナイカ」はあまり頻繁ではないが、「確認用法」より多く使われている。いずれにしても、聞き手のなわ張り内の情報に関して、話し手が推測を加えながら聞き手に確かめるということは、少なくともこのデータから見る限り、極めて少ないのである。

その原因は何なのか、4 節と 5 節で述べる。

4. 「聞き手の私的領域」理論（鈴木 1989 ; 1997）とその適用範囲

鈴木（1989）では、神尾の「情報のなわ張り」理論を援用することによって、「聞き手の私的領域」と日本語の丁寧さの関係について、説明を行っている。

鈴木（1989）の主張する「聞き手の私的領域」は「聞き手の欲求・願望・意志・感情・感覚など個人のアイデンティティに深く関わる領域」、鈴木（1997）ではさらに「行動、家族、所有物」など、をも含むものとしている。

例えば、来客に「コーヒー召し上がりたいですか」と尋ねることは、語形式上は丁寧な表現であるが、「願望」という「聞き手の私的領域」を侵害し、聞き手に不快感を与えてしまうので、日本語としては不自然である。

鈴木（1989）の理論では、見かけ上の丁寧さ（スタイルや語彙の選択といった語形式による発話の丁寧さ）と本質的な丁寧さ（「聞き手の私的領域」に踏み込まない配慮）を区別し、即ち、後者の語用論的な視点を取り入れることによって、敬語や待遇表現だけでは説明できない問題も説明できるようになるのである。

但し、鈴木（1989）では、「聞き手が親しい間柄で話し手と同等の関係にある場合には「聞き手の私的領域」に関する発話はごく自然なもので、失礼な感じを抱かせることはほとんどない」と述べている（p65）。

「聞き手の私的領域」という理論自体は説得力のあるもので有効的だと思われるが、その理論の適用範囲に関しては、もう少し検討が必要だと考えられる。

ここで、もう一度表 2、表 3 の数字と「確認用法」との関係について考える。表の数字で計算すると、「ネ」を除けば、20 代の女性友人同士では 1 分間に平均 2.5 回、50、60 代

の女性友人同士では1分間に平均3回ぐらい「確認用法」を使っていることになる。

それでは、「確認用法」の会話における役割は何なのか、言い換えれば、何のために「確認用法」が使われているのか。筆者は各表現形式について調べて、次のような結果を出している。

使用頻度の一番高い「ヨネ」は「知識形成中」という意味特徴を生かして、会話の中で聞き手と確認を取ることで「共感的な効果」を獲得し、多用されている（張：投稿中）。そして、自然会話における「デハナイカ」と「ダロウ」は殆ど「認識喚起」という意味で使われ（「デハナイカ」は98%、「ダロウ」は83%）、「デハナイカ」は聞き手への「認識喚起」を通して話題や情報を提供するという表現機能、「ダロウ」は聞き手への「認識喚起」を通して聞き手に確認を求め話し手の持っている情報や主張の正確性を強調するという表現機能を持っている（張：投稿中）。

以上のような表現形式に比べて、「ノデハナイカ」は明らかに使用頻度が低い。ゼロに近いというデータが示した結果は、いくら親しい間柄でも、日本人が「ノデハナイカ」で相手と確認を取るのを好まないことを示唆している。

前も述べたように、「ノデハナイカ」は「肯定への傾き」を持ちながら基本的に話し手の推測を表している。それは聞き手の前で使う時、聞き手のなわ張り内の情報について推測する場合、聞き手への「確認」となり、聞き手のなわ張り外の情報について推測する場合、聞き手への「意見要求」となっているわけである。聞き手のなわ張り内の情報について推測しそして聞き手に確認することは、「聞き手の私的領域」への侵害だと考えれば、その低使用頻度の理由もわかるであろう。

例えば、親しい友達同士の会話で、相手も祭りへ行くだろうと思って聞く場合、

(21) 行くよね？

(22) 行くでしょう？

(23) 行くんじゃない？

「ヨネ」は「あなたが行くのは当然だと思っている私の考えは正しいかどうか」について相手に確認を求めている、「共感的な効果」を狙った「確認用法」である。「ダロウ」と「ノデハナイカ」を比べてみると、「ダロウ」が聞き手への伝達を強調するものであるのに対して、「ノデハナイカ」は話し手の推測を中心とするものである（張 2008；張 2008）。母語話者も「ノデハナイカ」の多用に抵抗感を覚えると述べている。それは、おそらく、「ノデハナイカ」の推測という意味が作用していて、「ノデハナイカ」の使用は相手への詮索に結びつきやすいからであろう。

以上から、「話し手が自分の判断について聞き手に確認を求める」という「確認用法」は自然会話で使われる時、意味論的な要素がその根底にあって、語用論的な要素にも大きく影響されているということがわかる。「ヨネ」と「デハナイカ」はそうで、本稿の考察対象である「ノデハナイカ」も「推測すること」は「聞き手の私的領域」への侵害だという語用論的な制約があって自然会話ではほとんど使われていないのである。

「意見要求用法」の場合は聞き手のなわ張り外の情報について推測を行っているので、「聞き手の私的領域」への侵害とならず、多用しても失礼にならないのである¹²。

以上の分析から、鈴木（1989；1997）の「聞き手の私的領域」理論は聞き手が親しい間柄で話し手と同等の関係にある場合にも適用できるということがわかった。そして、「聞き手の私的領域」の適用範囲を拡大して、自然会話において「ノデハナイカ」が「確認用法」として殆ど使われない理由を探ってみた。それは要するに、聞き手のなわ張り内の情報について推測し聞き手に確認を求めることは「聞き手の私的領域」への侵害で親しい間柄でも多用すると失礼になるということである。鈴木 of 理論は日本語の丁寧さに関わる語用論的現象を捉えたもので、「ノデハナイカ」の低使用頻度は言語普遍の理論の一つである Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論を用いて解釈することも可能である。

5. ポライトネス理論からの解釈

言語行動に関する普遍理論の一つとして、Brown & Levinson（1987）のポライトネス理論がある。「フェイス」という概念を鍵概念として、人間には、基本的な欲求として、「ポジティブ・フェイス（positive face）」と「ネガティブ・フェイス（negative face）」という二種類のフェイスがあるとしている。ポジティブ・フェイスとは、他者に受け入れられたい、認められたいという欲求であり、ネガティブ・フェイスとは、自分の領域を邪魔されたくない、立ち入れたくないという欲求のことである。

Brown & Levinson は、この基本的欲求としての二つのフェイスを脅かさないように配慮することが、ポライトネスであると捉える。そして、それぞれ、ポジティブ・フェイスに訴えかけるストラテジーを「ポジティブ・ポライトネス」、ネガティブ・フェイスを配慮するストラテジーを「ネガティブ・ポライトネス」と呼んでいる。

ポジティブ・ポライトネスは、例えば、相手の何かを誉めたり共通の興味を強調したり相手を楽しくさせるような冗談を言ったりすることである。ネガティブ・ポライトネスは、例えば、何かを依頼するときに、その度合いを軽減するように間接的な表現をするようなことである。

親しい女性友人同士の雑談に出てくる「確認用法」は一見ポライトネス理論とあまり関係がなさそうであるが、各表現形式の使用頻度と分布状況进行分析し、「確認用法」の会話における機能を考察することによって、ポライトネスとの関連も明らかになってきた。それはつまり、「確認用法」も一種の言語行動で、しかも、本質的に相手のフェイスを傷つけることもあるのである。「自分の判断について聞き手に確認を求める」という「確認用法」の定義から見れば、「ノデハナイカ」が使われる場合、その判断する内容が聞き手のなわ張り内の情報で、聞き手のなわ張り内の情報について判断を下すことは聞き手の私的

¹² 今回のデータでは、「意見要求用法」の「ノデハナイカ」も13例しか出ていないが、「意見要求用法」は「確認用法」と違う用法なので、その数字を他の表現形式の使用率と比較するのはあまり意味のないことだと考えられる。一方、1:13（「確認用法」の「ノデハナイカ」:「意見要求用法」の「ノデハナイカ」）という数字比は「ノデハナイカ」の用法別の差から見れば、意味のあるものと思われる。

領域への侵害になりかねない。「ゼロに近い使用頻度」は「確認用法」が相手の領域に立ち入らない方向で使われていることを物語っている。それは、Brown & Levinson の理論ではフェイス侵害行為を行わない戦略に入るが、相手のネガティブ・フェイスを尊重する意味から考えれば、鈴木「聞き手の私的領域」を尊重することと同じ趣旨になるわけである。

敬語や間接表現など明示的な戦略と比べて、「確認用法」での「ノデハナイカ」の不使用は目に見えない形で相手のフェイスを保つ役割を果たしていると考えられる。親しい友人同士の雑談会話でも、「私的領域」や「他人に立ち入られたくないネガティブ・フェイス」を尊重するという語用論的制約があって、「確認用法」表現形式の使用頻度に大きな差が出ているのである。

6. まとめと課題

本稿では、自然会話を観察し、他の表現形式に比べて「確認用法」の「ノデハナイカ」が殆ど使われていないという事実を指摘した。そして、「ノデハナイカ」の低使用頻度を鈴木「聞き手の私的領域」理論、続いて、言語普遍の理論の一つである Brown & Levinson のポライトネス理論で解釈することを試みた。

意味論的立場から見た表現形式の持っている「意味」と語用論的な制約がかかる自然会話における表現形式の「使用」とは別問題であることを、「確認用法」の「ノデハナイカ」を通して、説明できたと思う。そして、どういう語用論的な制約があるのかについても分析してみた。

それは日本語独特の現象なのかどうか、中国語との対照を通して、さらに追究していきたい。

【参考文献】

- 安達太郎(1999)『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』大修館書店
- 国立国語研究所(1960)『話しことばの文型 (1)一対話資料による分析一』秀英出版
- 鈴木睦(1989)「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧さは如何にして成り立つか—」『日本語学』2月号 pp.58-67 明治書院
- 鈴木睦(1997)「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則編『視点と言語行動』pp.45-76 くろしお出版
- 田野村忠温(1988)「否定疑問文小考」『国語学』152号 pp.16-30
- 張恵芳(2008)「「推量確認要求」用法の日中対照研究—情報伝達・語用論的な観点から—」『言語学論叢』オンライン創刊号(通巻27号)pp.103-114
- 張恵芳(投稿中)「自然会話に見られる「ダロウ」と「デハナイカ」の表現機能の違い—意味論的に互換性を持つ「認識喚起」の場合—」

- 蓮沼昭子(1995)「対話における確認行為 「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」仁田義雄編『複文の研究(下)』pp.389-419 くろしお出版
- 三宅知宏(1996)「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89号 pp.111-122 日本語教育学会
- 宮崎和人(2000)「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106号 pp.7-16 日本語教育学会
- 宮崎和人(2005)『現代日本語の疑問表現 疑いと確認要求』ひつじ書房
- Brown, P., & Levinson, S.C. (1987) *Politeness : Some universals in language usage*
Cambridge University Press
- 张惠芳(2004)〈关于日语推测语气表达形式“のではないか”的考察〉《日语学习与研究》2
- 张惠芳(2008)〈关于日语“推量要求确认”表达形式「だろう」、「のではないか」、「ね」的考察——从信息传达和语用学角度——〉《日语研究》6 北京: 商务印书馆
- 张惠芳(投稿中)〈运用“礼貌理论”分析日语「ヨネ」的确认用法——通过与「ダロウ」进行比较——〉

【資料】

- 宇佐美まゆみ(2007)『BTS による多言語話し言葉コーパス 1(日本語母語話者同士の会話)2007年版』
- 筑波大学「応用言語学演習」授業用データ (2008)

【文字化記号凡例】

- 、 ポーズ。1秒未満の切れ目。
- ー 長音。前のモーラがのばされている。
- ？ 疑問文或は語尾を上げるなどして疑問の機能を持つ発話につける。
- { } 非言語的な行動。
- ／／ 発話の重ねられている部分(始まり)。
- ／ 発話を重ねている部分(始まり)。
- … 発話が続く。